
 <書 評>

杉並組合病院長 川 上 武 著

内 科 往 診 学

医学博士 永井友二郎

“往診は臨床医の生活の重要な一部分で、地域医療を推進する有力な手段である。”と川上武博士は書き出している。また“いままで往診についての系統的発言は寡聞にして知らない。既存の医学・医療が入院・外来診療に立脚して推進されてきたことを考えると、それも当然のことだが、その根底に現場軽視の医療思想のあったことも事実である。”とのべ外来診療の単なる延長としては代替できない診療形態として、往診を正面からとりあげたのが本書である。

私たちは、往診について日ごろ種々な見解をもっている。“往診先は診療の条件が悪いから、できるだけ外来にこさせるようにしている。”先生方が少なくないと思う。そして往診しない建前にしている方もある。

この点に関する著者の姿勢はつぎのように明確である。“臨床医は外来診療を通じて、地域住民の疾病の治療、健康相談を行なうばかりでなく、往診では患者の家庭のなかにまで入りこみ、患者の生活の実態にじかにふれる。臨床医の診察が問診によりはじまり、その際に患者の社会

生活の内容をきくことの重要性が強調されているが、診察室のなかの医師と患者の人間関係だけでは限界がある。これらの点は1度の往診で大幅に改善されることが多い。まさに往診こそ動く診察室である。

患家を訪ずれることによって、社会環境、家庭内の人間関係といった、治療をすすめる上に有力な情報をうることができる。……”と。

私は本書を手にして、まずこの往診のもつ現実的意義を深く考えさせられた。従来、往診先で見聞した家庭の諸条件は、診療上それほど重要でないと思いこんでいたが、この川上氏の視点に立って再検討してみると、思いあたるふしが少くない。

本書を手にして第二に感じたことは、現在の医学教育のなかに、この往診学を含めた第一線での臨床医学を系統的に教える必要があることである。私たちは第一線で働く医師として、今まであまりにも教えられることが少なかった。めいめいが、大学流の医学知識をもとでにして、実際の症例にぶつかって処理していたのである。

この第一線の実地臨床医家が医学教育のレールにのるためには、それだけの内容が地道に開発されなければならない。そしてそれは容易な仕事でなく、時間のかかることだと思う。そして今、何より必要なことはこれを実践することではなかろうか。

川上武博士はこの実践の成果を本書として世に問われた。内容は総論的事項のなかで“夜間往診の断わり方”や“往診時すでに死亡していたときの処置”など大へんきめ細かい点に触れているほか、各論的項目では各種の急患の往診と老人や重症者の定期往診につき、リハビリテーションや家族にたいする注意までふくめ詳述しており、さらに小児急患の往診、往診先でできる臨床検査、往診に必要な器械と医薬品についても重要な問題を検討している。

本書は川上武博士が、その仲間20数名の方々の協力を得てまとめられたという。往診は実地臨床における大きな課題である。本書の上梓を機として、全国の実地医家の方々が往診学をさらに開発、拡充してゆかれることを願う気持ちにさせられた。本書は大きな問題を医学界に投げかけている。

A5判 頁302 図10 罫2,000 円90

— 医学書院刊 —